

ヒガシンカタイム通信⑥

ヒガシンカタイム NITS 大賞 優秀賞受賞！



NITS 大賞ってなに？

「NITS 大賞」は、独立行政法人教職員支援機構（NITS：ニッツ）が行っている取組で、学校の課題解決に向けた優れた実践を全国から募集し、表彰・発信するものです。

どんな賞を受賞したの？

全国から103点の応募の中から、上位10点の実践に選ばれました。その中で、大賞1点・準大賞2点に続く「優秀賞（5点）」を受賞しました。

どんな取組を応募したの？

松山発！巻き込み型改革！
～「ヒガシンカタイム」で始まる
「観」の転換～

「生徒を主語にした学校教育の実現」を目指して取り組んできた、ヒガシンカタイムのあゆみをまとめました。
「はじめから完璧を求めず、アップデートし続けること」「1人の100歩ではなく100人の1歩」を大切にしながら、生徒・教職員・保護者・地域の方々とともに取組を進めてきました。

どんなところが評価されたの？

生徒が主体的に学ぶ姿に加え、学校だけでなく保護者や地域の皆様も巻き込みながら取組を進めてきた点が評価されました。ヒガシンカタイムを通して、「学び」に対する考え方にも変化が広がっています。

お礼

今回の受賞は、日頃から温かく見守り、支えてくださっている保護者・地域の皆様のおかげです。心より感謝申し上げます。今後も、よりよい学びを目指して挑戦を続けてまいりますので、引き続きご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

NITS 大賞 優秀賞 受賞レポート

エントリー名：愛媛県松山市立東中学校
活動名：松山発！巻き込み型改革！ ～「ヒガシンカタイム」で始まる「観」の転換～
解決すべき課題 生徒を主語にした学校教育を実現したい！「ヒガシンカタイム」への挑戦を通して、「観」の転換に取り組み、生徒・教職員・研修機関が互いにアップデートし続ける学校を目指す。 生徒：「座っていれば先生が教えてくれる」から「自ら学びを創り出し、学び続ける」へ。 教職員：「生徒に教える」から「生徒の学びを支え、伴走する」へ。 教育行政：「教職員に知識を一方的に伝達する」から「教職員と伴走し、共に成長していく」へ。 目標：生徒に学びを委ねる「ヒガシンカタイム」への挑戦の過程で、学校を取り巻く人間の「観」を変えていくことにより、誰もが主体的に関わり学び合う学校づくりを目指す。 方針：管理職・同僚・教育行政を巻き込む。1人の100歩ではなく、100人の1歩を目指す。最小労力・最大出力を実現し、持続可能な仕組みづくりを目指す。 活動内容 ヒガシンカタイムは「生徒に学びを委ねる」ことを軸に据えた新しい学びのかたちである。生徒自身が「何を・誰と・どこで・どのように」学ぶかを自ら選択し、自由な学びに挑戦する40分間とした。Google スプレッドシートに毎時間の目標と振り返りを記録し、全校生徒で共有することにより、学びの質の向上を図る。
なぜ、ヒガシンカタイムをするのか？ 1 生き方の変化 人生100年時代。学びは「学生の間だけ」ではなく、「大人になっても続けていくもの」へと変わっています。 2 社会の変化 一人一台端末や生成AIなど、教育の形も大きく変わってきています。社会や技術の変化に対応する・変化を生み出す人材が重要されます。そのためには必要なのは、自ら学ぶ力です。 だからこそ、「座っていれば先生が教えてくれる」学びから進化して、「生徒が自分で学びをプロデュースしていくこと」に挑戦しています。
全教職員を巻き込む ・管理職とヒガシンカタイムの構想を共有し、理解と支援を得た。 ・職員会で企画書をもとに説明し、目的と方法を明確に伝えた。 ・Google スプレッドシートを用いて、教職員同士で活動時の良かった点や改善策を共有する。 全校生徒を巻き込む ・全校オリエンテーションで「なぜ行うのか」「どんな時間にしたのか」を熱く伝えた。 ・Google スプレッドシートで学び方を共有し、互いに学び合う仕組みをつくる。 研修センターを巻き込む ・ヒガシンカタイムの意義や、それに係る研究の方向性について共有し、共通理解を図った。 ・教職員への伝え方やアンケート内容について、一緒に検討した。 ・職員会やオリエンテーション、ヒガシンカタイムに継続的に参加を得て、助言を受けた。 保護者・地域を巻き込む ・ホームページや学校だよりで目的や活動内容を発信し、理解を広げた。 ・学校づくり推進協議会でPTAや学校評議員に報告した。

取組の過程 生徒はすぐに新しい学び方を受け入れ、楽しみながら活動した。教職員側の意識変革が難しかったが、「実践しながら理解してもらう」というスタイルが功を奏した。 無関心層へのアプローチ ヒガシンカタイム開始前は、教職員・生徒ともに約2割程度に無関心な様子が見られた。まず生徒には、「学習のピラミッド」を用いて、友達と教え合うことの価値を伝えた。仲間の主体的な姿が刺激となり、自然と周囲にも良い影響が広がっていった。一方で、教職員には、初めから全員のやる気を求めず、「実践しながらアップデートしていく」方式を採用した。回を重ねることに関心と理解が深まり、学校全体に前向きな空気が生まれた。無関心層を直接引き込むのではなく、周りに大きな流れをつくり、徐々に巻き込んでいくことに成功した。 教師の「生徒を手放すこと」への不安への対応 生徒が目に見えない場所で活動することに対し、生徒指導面での不安と、学習内容の見取りが十分にできないことに不安を感じる教職員もいた。そこで、生徒の活動場面にできるだけ教職員を配置できるよう人員を調整し、本校が愛媛大学に隣接しているという立地を生かして教育実習生の協力を得ることで、見守り体制を強化した。また、学習面での不安に対しては、生徒に「学習のゴール・内容・振り返り」をスプレッドシートに記入させ、活動の様子を可視化することで、教職員が安心して生徒の学びを見守れる仕組みを整えた。 教員の負担感への配慮 新しい取組に対し、「教職員の負担が増えるのでは」という懸念もあった。そこで、活動の流れを示したプリントを配布し、準備や進行の負担を最小限に抑えた。実際、教職員の負担は想定よりも少なく取り組むことができていた。全校オリエンテーションにも全教職員が参加し、ヒガシンカタイムの意義を生徒と共に確認する機会を設け、教員のモチベーションを高めた。 協働の広がり 職員会で「一人では難しいので仲間がほしい」と呼びかけたところ、各学年から数名の教職員が自主的に協力を出してくれた。その先生方と共に改善を重ねる中で、徐々に「自分事」として考える教職員が増え、学校全体に前向きな風土が広がっていった。 活動の成果 ヒガシンカタイムの実施を通して生まれている「観」の転換。 ・生徒は「学び方を自分で決める」ことに楽しさを感じている。ヒガシンカタイムの日をカレンダーに書き込んだり、「回数を増やしてほしい」と話したりする生徒も見られた。日常でも自分のペースで学習に取り組む、友達と教え合いながら学ぶ姿が見られるようになった。 ・教師の意識にも変化が見られた。当初は「生徒の動きを把握できるのか」「学力向上につながるのか」といった不安もあった。しかし、生徒が楽しそうに自ら学び、友達と学び合う姿を目にするうちに、学びの在り方を考え直すきっかけとなった。こうした経験が通常の授業にも波及し、「教える」から「学びを支える」授業づくりを模索する教師が出てきた。 ・予想を超えた成果として「保護者・地域の観の転換」も生まれた。学校づくり推進協議会での発表やホームページ等での発信を通して保護者や地域の方々の関心が高まり、「ヒガシンカタイムを見てみたい」「一緒に加わってみたい」という声が多く寄せられた。これを受け、保護者も参加できる『ヒガシンカタイム・スペシャル DAY』を企画するに至った。従来の「子どもの学びを見守る」立場から「ともに学ぶ」立場へと変化が生まれたのである。ヒガシンカタイムへの挑戦を通して、誰もが主体的に関わり、学び合う学校づくりが今、東中学校で実現しつつある。さらに来年2月にはまつま教育研修センターフェスタ 2026 でヒガシンカタイムに関する取組発表を行う予定である。松山市内外にもこの流れを波及させたい。
--